

野菜くらぶ

北京航空航天大学

1.見学と感想

大型バスに揺られ少し眠った後に目を覚ますと、既に喧騒の東京市中を離れ、静かな群馬県の農村に向かっていた。紅葉に覆われた山間の溪流と豊かな水の流れる川を過ぎた。私たちは矢も盾もたまずに車から飛び降り、大自然を満喫した。

土の匂いに野菜のすがすがしい香りが入り混じり、足元では踏みつけられた枯れ草が「カサカサ」という乾いた音をたてていた。道に沿って小さな坂を上がり、周りを一望すると、整然とした樹林と色づいた田園が目の前に広がり、遠くに見える山は、画仙紙に描いた水墨画の滲みのように濃淡が融け合い、山頂の雪が雲に霞んでいた。こんなに美しい風景の中で仕事のできる人たちが何とも羨ましい気がした。坂の上で野菜くらぶの説明係りの竹内潜さんと通訳の呉さんに会った。竹内潜さんはまだ20歳台の若者で、スキー選手でもあるので、農作業のない時はチームに参加してトレーニングに励んでいるという。呉さんは農学博士の学歴を持つ中国人で、私たちは彼のことを「呉博士」と呼んだ。

彼たちの案内で私たちは先ずトマトの実験用ハウスに入った。外の澄んだ冷たい空気に比べ、ハウスの中はポカポカと暖かく、ハウス内の温度は一定に保たれていた。人の背丈よりも高く成長したトマトの株の傍に立って、私たちは竹内潜さんの説明に従ってハウスの状況を理解していった。このハウスでは三つの場所から取って来た土でそれぞれトマトを栽培し、地元農家はどの土壌がよりトマトの生長に適するかを見て栽培場所を選び、栽培面積を徐々に拡大していくという。竹内潜さんは天井板から吊り下げられた温度センサーと土中に埋められた水と栄養液を送るための配管も見せてくれた。ハウス内では播種から灌水にいたるまで、また施肥から温度調節にいたるまですべてがコンピュータ制御で、人は決まった時間にボタンを押すだけでいいという説明があった。ハウスを出た私たちは、栽培方法は確かに先進的なことは分かったが、こうした方法で栽培された野菜が果たして美味しいのかどうか疑問に思ったが、心配することはなかった。大きなカゴ一杯のトマトが用意されており、それを食べた人たちの笑顔を見れば、ここのトマトが美味しいことがすぐに分かった。

次に、またバスに乗って数キロ離れた野菜の集荷所を訪ねた。暖かいトマトのハウスとは違って、倉庫内の冬の外気温より寒く感じた。震えながら倉庫から出て、そこに設置されていたレストランに入り、日本式の弁当を食べた後、沢浦社長から野菜くらぶの概況についての紹介があった。

集荷所を後にする時、暖かい陽光が雲間から射してきた。次にアスパラガス畑を見学した。そこでアディダスのスポーツキャップをかぶったもう一人の人に会った。彼は野菜くらぶ最も早期の創設者の一人だった。アスパラガスの栽培方法、成長サイクル、供給ルートについての詳細な説明のほか、野菜くらぶが地元のサラリーマンを兼業作業員として募集し、出勤前に野菜の摘み採りや都市部への輸送を助けもらうということを通じて、地元のマンパワーを十分かつ効率的に活用しているとの紹介があった。

見学を終え、日本の農業技術とあらゆる場面に環境意識が反映されていることに強い感慨を覚えた。ハウスでは完全に「緑色」(エコ志向)の栽培、灌水、摘み採りが行われ、すべてのプロセスですべての農薬や化学肥料を使わないか、または使う量を減らしている

という。そうするとコストが上がる反面、収益は下がり、ひどい時にはコスト割れになる場合もあるが、野菜くらぶでは常に「緑色」生産が行われている。更に重要なことは、ここで働く青年たちが都会の喧騒と便利さを捨てて自ら進んで農業に身を投じているという点である。しかも彼たちによって新しい生産方式と近代的設備がもたらされ、灌水や温度調節などの農業生産の基本プロセスでオートメーション化を実現し、人力を節約し、生産効率を高めているのだ。発展途上国の中国にとって、これらすべてが参考になると思った。目下、経済が急成長を遂げる中国には強大な農業基盤が必要だが、広大な土地がありながら、その使用が不合理で、しかも一部の地域ではまだ焼き畑農業行われており、土地の利用率は低い。こうした状況の中で、中国は工業と非農業産業に十分な生産材料と生活物資の供給がなされていない。今、中国では知識を農村に広め、知識を持った青年が農業に身を投じ、先進的な生産方式や機械を農村に持ち込むことが求められている。中国の農業改革のスピードが加速され、土地利用の合理性と生産効率が向上すれば、中国の近代化と工業化に確固たる基盤を提供することになり、国民経済の急成長がいつそう促されることになる。経済成長の過程では効率を最優先して周囲の環境を破壊するという状況は絶対に避けなければならない。持続可能な発展を学び、大気・水・土壌などの基本的な生産基盤と生活基盤をしっかりと護り、後代のために良好な生産と生活のための環境を創出していかなければならない。

2.野菜くらぶ見学時の質問

Q：各種生産用水は循環利用が難しいために、農業用水の利用率は工業用水のそれより遥かに低く、しかも化学肥料による土壌と水源汚染などの問題があるが、野菜くらぶはこうした問題をどのように対処しているか？

A：用水量を厳しくコントロールしている。しかも動態制御によって作物が生長している土壌にどういった種類の元素が過剰になっているか、また必要な元素は何か、毎日検査・測定を行い、必要に応じて安全で無害な有機肥料、緑肥、堆肥を施している。化学肥料は原則使わないことになっている。病虫害が発生した時は、先ず無毒無害な微生物製剤を使うようにしている。こうして有機栽培作物としての品質を保証し、環境汚染を極力減らしている。

Q：現在、中国では国が数千年にわたって実施してきた農業税が免除されるようになってくるが、日本政府はこうした先進的な生産方式に対し何か優遇措置を設けているか？ 野菜くらぶの発展にとって最大のボトルネックは何か？

A：国はわが社についてかなり関心を払い、支援をしてくれている。例えば各地の土壌別の生産効率を見る実験農地の 50%の資金が政府から援助されたものである。また、税制上の優遇措置もいくつかある。発展を阻害している要因としては二つが挙げられる。それは科学技術の進歩が需要に追いつかないことと人材不足だ。

Q：野菜くらぶの生産および経営方式の主な特徴は何か？

A：パンフレットの中にもあるが、先ず、当社は新方式のハイテク管理による、研究センターを集積させた農業生産会社であり、株式参入という形で農家を組織している。様々な作物の生長環境に対応し、様々な地域の様々な気候特性を利用して栽培を行っている。例えば、夏季には海拔の高い群馬県を主な生産基地として生産を行い、気温の低い冬季

は主に海拔の低い静岡県で生産を行っている。こうした生産方式によって生産を安定させ、生産契約を通じて農家の収入を安定させている。

また、日本国内の農業人口の平均年齢は 60 歳を超えているが、当社の従業員の平均年齢は 43 歳で、正に働き盛りの人たちだ。20 歳台の若者もいて、新鮮な活力になっている。なお、当社は通年供給メカニズムの確立を発展目標として掲げており、現在、巨額を投じて冷蔵倉庫、冷蔵車とパッケージセンターの建設を行っている。顧客が一年 365 日、いつでも新鮮な野菜を予約購入できるようにすることが私たちの目標だ。

Q：輪作によって単位生産量は高くなるが、土地利用率は下がるという問題があるが、これについてはどうか？

A：(笑) 土地は強度の高い生産を行った後は必ず休養が必要で、土壌を培養することが必要になる。それはちょうど人が激しい運動をした後に休まなければならないのと同じことだ。

Q：遺伝子組み換え作物についてどう考えるか？

A：遺伝子組み換え作物が人体に対し完全に害がないという確実な証明がまだなされていない。したがって、今は遺伝子組み換え作物の生産はしていない。

3.重点

- (1)新技術の活用：ハウスが完全にコンピュータ化及び自動化されている。微生物製剤の利用。全ての輸送過程で低温環境による鮮度保持している。
- (2)生産計画の策定：前年に翌年の週単位生産量を定める精確な生産計画を策定している。
- (3)若者の参画：20 歳台の若い農業生産従事者がいる。役員の話では、比較的高い収入が望めるために、ますます多くの若者が野菜くらぶへの参画を希望しているという。
- (4)「ウィンウィン方式」で作物を収穫：農繁期には会社勤めの農家に出勤前の時間を利用して、作物の摘み採りを手伝ってもらい、作物の定時出荷を保証し、兼業農家の収入アップを図っている。